

絆

KIZUNA

公認会計士白門会 NO. 30

大学における人材育成について

中央大学商学部教授
経理研究所所長
渡辺 岳夫



昨年、11月に経理研究所の所長に着任いたしました。振り返りますと、1986年に中央大学杉並高等学校を卒業してから38年の月日が経とうとしています。長い歳月が流れましたが、中杉卒業後、中央大学商学部の学部生として4年間、中央大学大学院商学研究科の大学院生として6年間、そして中央大学の教員として24年間を過ごし、折り返し地点をとうに過ぎたところの人生のほとんどを中央大学との関わりのなかで生きてきました。中央大学に対する思い入れは強く、中大生のためにより良い教育を提供し、社会に有為な人材を送り出すべく、日々を尽力しております。

商学部は10年ほど前から、キャリア科目を充実させることに注力しています。学生のキャリア形成支援を重視し、組織と個人との関わりに重きを置いて、自立した社会人・職業人となるために必要な素養を涵養することが狙いです。とりわけ企業を取り巻く競争環境が厳しさを増し、かつ変化の度合いを速めていることを踏まえると、自ら考える力を持ち、あらゆる困難や環境に直面しても、それを乗り越えられる実践力のある人材の育成が、実学の商学部には強く求められていると考えているからです。

キャリア科目のうち、2019年度に新設された「スポーツ・ビジネス・チャレンジ講座」では、学生たち自身が自ら考案したソリューションを、実際に企業の現場に適用するところまでを、その内容に含むこととしました。同講座では、2023年度からは読売ジャイアンツの2軍と関東社会人サッカーリーグ2部所属の厚木はやぶさFCというサッカークラブの経営に商学部生が実際にチャレンジしました。具体的には、夏季休業期間中および冬季休業期間中に開催される試合興行に関する業務全般を担うこととなります。学生たちは、座学でサッカークラブ経営の基本を学んだうえで、試合興行を成功させるために必要かつ効果的な広報、企画、およびスポンサー営業の方法を考案し、実際にそれを適用するところまでチャレンジします。これまでの4年間の講座の学生たちは、主要メディアに何度も取り上げられるぐらい、記録的な集客を実現してきました。しかし、その陰には無数の失敗がありました。チャレンジに失敗はつきものですが、単に失敗を失敗で終わらせるのではなく、その失敗に関する情報を次の取組みに活かすことを学生たちは学びました。この講座を通じて、学生たちは「失敗を恐れること」を恐

れることを知ったのです。

さて、こういったキャリア科目の対象を、スポーツビジネスから順次拡大していくことも重要だと考えております。会計実務に学生が主体的にチャレンジする講座というのはいかがでしょうか？残念ながら、中央大学商学部の会計学科の志願者数は漸減傾向にあります。それに対応するかのようには、公認会計士試験の合格者数も伸び悩んでおります。優秀な学生を商学部に着きつけるためには、魅力的な学びを提供しなければなりません。例えば、企業の経営企画の実際の場面において、学生が身につけた管理会計のスキルを駆使して、実際

に企画を考案し、経営陣の前でプレゼンする。その企画がたとえ採用されなくても、その経験は学生にとって「会計」を見つめ直す、とても貴重なものとなることでしょう。同時に、こういった魅力的であり特色ある講座は、メディアにも取り上げられやすく、かつ高校生に対する訴求力も高いと考えられます。白門会の皆様のご協力をお願いできれば、これほど心強いことはございません。学生にチャレンジの場を、失敗できる場を、ご提供いたしますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

◆公認会計士白門会役員◆

会 長	山田 治彦
副 会 長	柴 毅
副 会 長	武内 清信
副 会 長	日高真理子
副 会 長	鷗高 利行
幹 事 長	高崎 博
副 幹 事 長	郡司 昌恭
副 幹 事 長	中原 國尋
幹 事	家富 義則
幹 事	石井 宏明
幹 事	板谷 秀穂
幹 事	加藤 暁光
幹 事	加藤 亮
幹 事	清水健太郎
幹 事	梶山 嘉洋
幹 事	村上 智昭
幹 事	森山 謙一
幹 事	山口 拓真
会 計 監 事	石野 研司
会 計 監 事	高津 明久

相 談 役	増田 浩二
相 談 役	木下 徳明
相 談 役	金井 一夫
相 談 役	福田 眞也
相 談 役	三和 彦幸
相 談 役	宮内 忍
相 談 役	遠藤 忠宏
相 談 役	伊藤 大義
相 談 役	黒田 克司
相 談 役	熊坂 博幸
相 談 役	成田 智弘
相 談 役	北方 宏樹
顧 問	中根堅次郎
顧 問	後藤 徳彌
顧 問	柏崎 周弘
顧 問	河合 明弘
顧 問	岸田 靖

(以上 37 名)

「古豪」中央大学



公認会計士白門会
会長

山田 治彦

今年の箱根駅伝は期待できる。というのが本年元旦までの多くの中大OBの心持であったと思う。

ずいぶん長い間、われらが母校は「古豪」と紹介されてきた。駅伝中継にとって古豪という用語は長年中大とともにあった。言葉の響きは悪いものではない。しかしながらよくよく考えれば、昔日の栄光を失ってから延々と凋落の日々を送っている状況を表現したものであり、「昔はよかったけれど今は全然だめ」ということの婉曲的表現でしかない。昨年の久々の健闘もあり今年は「古豪復活」になると期待したが、夢と潰えてしまった。

実はわが業界でも中大は駅伝以上の「古豪」である。その昔は公認会計士（2次）試験合格者はずっと第一位だった。この原稿を書くに先立ち過去の「絆」を調べたところ、1993年当時、中央大学出身の公認会計士は1,186名、公認会計士総数9,706名の12.2%を占め第1位であった（2位慶大1,015名 3位早大885名）。また日本公認会計士協会の役員に関しては全体の25%が中大出身者。在京役員に至っては41%(15/37)が中大出身者となっている（以上、「絆」第1号より）。ただし公認会計士第2次試験合格者については、この時点ですでに3位に甘んじている。試験合格者については、慶大、早大の後塵を拝し、年々差を詰められる状況とはいえず3位の座はキープできる状況と認識していたが、今回の報告にもあるように2023年の合格者は6位であった。4位～6位はダンゴ状態ではあるものの6位というのは驚愕の事態である。しかも合格者数は3位明大のほぼ半数という状況である。まさに「古豪」でしかない。

昨年7月に公認会計士白門会会長に就任し、その後各大学の公認会計士会、会計人会の集まりに

出席する機会を得た。各大学とも悩みは同じである。一言でいえば組織力の低下、具体的には若い方々がなかなか参加してくれないということである。実は各大学のこのような集まりに参加して「古豪」であることのありがたみを感じている部分がある。まず「公認会計士」というくくりで組織できている大学は意外と少ないということ。「会計人」というくくりで税理士や経理実務担当者も会員に含めている大学も多く、「公認会計士」だけで組織化できる環境にある大学はむしろ少数派である。会員がすべて公認会計士ということは会の運営としてやりやすいことは確かである。また、他大学では会長や主要な幹部を長く担当されている例も多い。会長他の引き受け手がないということが主要な理由だと思われるが、わが公認会計士白門会は設立以来の任期2年を今まで踏襲することができている。意欲のある人が会長として長く努めれば会としても活性化するのではないかという意見もあろうかと思う。しかしながらこの会を設立するにあたり初代川北博会長は、「この会は中央大学出身の公認会計士によるそれらのための会であり、特定の人やグループのために運営されてはならない、そのために会長以下の役員は早期交代制が望ましい」と述べている。当時を推測するに会計士協会の役員選挙のために様々な会が組織されるような状況もあったと思われる、そのような会とは一線を画すということで設立されたということであろう。以来30年会長任期2年を遵守してきたというのもそれなりの人材がこの会に参画していたということの証だと言える。他大学との比較においてわが会を評価すれば、それほど悪くないというのが私の現在の認識である。

さて、その中で公認会計士白門会の運営を他の

役員とともに任されたのであるが、どのような方向を目指すべきか。

多くの会員、特に若い世代の会員の参加が増えれば、会としては活性化することになると思うが、そのような施策が果たしてあるのか？

忙しい毎日を過ごす会員が時間を割いて参加したいと思うコンテンツを会として継続的に用意できるかという現実的には難しい。年2回実施している研修はそれなりに時宜に合った内容と講師を用意してきた実績があるが、これにより参加者が増えたかというところではない。監査法人内や会計士協会のCPDでの研修は年々充実しており、これらに会として対抗できる余地はない。研修以外のイベントを行った実績もあるが厳しい結果に終わっている。

現在、中大出身の公認会計士は572名であるが、そのうち会費を納めているのは94名に過ぎない。参加率は極めて低いのであるが、これを会員の側から見れば

- ・公認会計士白門会という会があることを知らない
- ・あることは知っているが参加することに魅力を感じない。
- ・多少の魅力を感じないことはないが、出向いて参加するまでの優先順位を感じない。

というところではないか。

ということであれば、本会の運営は本会のことをよく知らない方々に「多少の魅力」を感じてもらおうこと、「多少の魅力」を深めてたまには参加してみようかと思ってもらうこと、程度しかないのではないか。運営を担う役員もまた忙しい日々を過ごしており、ほどほどの精力的な活動しか求められない。会が持続的であるためには役員の負担がかなり重要な要素になる。

一方で本会の存在意義はすでに消滅しているのではないか？という意見もあろうかと思う。現に多くの会員が会費を納入しておらず、財務構造的には一部の会員の納入した会費で全体の費用が賄われている。本会の存在を知らない、多くの会員が会費を納入していないということが本会の存在意義がすでになくなっていることの証左であると

言えるのかもしれない。

しかしながら、私としては「公認会計士白門会」が存在していることが「多少の魅力」になっていると信じる。胸に手を当て考えれば中大出身者で構成される本会があってほしい、と多くの会員が思うところではないかと考える。

幸い古豪である。現在の会員はそれなりにいるのである。課題はあるが持続可能な組織づくりはまだ可能であると思う。

本会が持続可能であるためには、若い方々の会への参画が不可欠であるが、これが難題である。思えば自分自身もこの会に自ら望んで参加したいと思って参加していたわけではない。上司、先輩から参加することを勧め（強要？）られ、浮世の義理と思って参加していた記憶が確かにある。

数年前より公認会計士試験合格者は会費無料としているが、そんなことで監査業務で忙しい日々を送っている若手がこの会に参加してくれるとは到底思えない。

ただ、去年の合格祝賀会で合格者の内の交友関係の広い人3人ほどに同期合格者の連絡係をお願いしている。何人かで誘い合っ来てくれないかという淡い期待であるが、何とか持続可能な体制を作るために役立ってほしいと思っている。

公認会計士白門会に参加すれば交友関係が拡がり結果的に自身の仕事に役立つということであれば参加者は自然と増えていくものと思われる。しかしながら仕事の融通を会の目的とすることはできない。そもそもこの会は「特定の人やグループのため」になってはならないのである。ただし、結果として仕事に繋がったということであれば全く問題ない。会に参加して交流を深める中で人として評価され仕事を依頼される、あるいは一緒に仕事をするということによりよい業務ができたというようなことであれば、まさにこの会の趣旨にかなうことである。

現在の会の運営は会費および寄付により成り立っている。会費を納入いただいているのはわずかに94名(2024年2月現在)であり、年会費は6,000円である。会の活動として活性化のためにいろいろ

ろと取り組んできた経緯があるが、首都圏以外に在住の会員から見ればなかなか参加するのは難しい状況にあると思われる。となると6,000円に対する対価は会報の「絆」だけということになる。

「絆」という用語が広く用いられるようになったのは阪神淡路大震災以後のように思われる。人と人との強いつながりが求められる厳しい状況下でより結束を強め困難に立ち向かうというようなニュアンスであろうか。我が会報「絆」は阪神淡路大震災（1995年）より前の1993年に第1号が

発刊されている。当時として見事なネーミングであると敬服する。本会の設立趣旨に立ち返り会員間の「絆」を深めるための内容にしていきたいと考えている。地方在住の会員の方々にも「絆」に関するテーマでの執筆をお願いしていきたいと考えている。

中央大学出身の公認会計士間の絆を深めていくこと、このために本会の運営の持続可能性に向けて取り組んでいきたい。古豪としての財産のあるうちに。

◆会費納入のお礼◆

会費の納入ありがとうございました。

(2024年2月19日までにお振込みいただいた方を掲載させていただいております。)

秋山 一正	大鷲 雅一	小林 邦一	土井 英雄	牧 憲俊
麻生久美子	柏崎 周弘	齋藤 俊勝	中嶋 克久	増田 進
池田 直樹	勝木 重三	齋藤 慶則	中西 清	峯 敬
石井 宏明	加藤 厚	佐藤 俊一	鍋島 明人	峯岸 芳幸
板谷 秀穂	加藤 暁光	澤田 昌輝	成田 智弘	宮尾 克己
市川 育義	加藤 且行	篠原 通夫	野口 孝史	宮下 怜
伊藤 敏	金井 一夫	柴 毅	野崎 一彦	宮野 定夫
伊藤 大義	神山 敏夫	清水健太郎	長谷川直彦	村田 英孝
稲葉 欣久	河合 明弘	白石 雅敏	秦野 晃郎	森下 隆之
今西 崇雄	川野 治夫	梶山 嘉洋	塙 善光	森杉 美保
上澤 武司	河村 拓栄	鈴木 茂夫	濱口 植士	森谷伊三男
上原 佑介	川村 芳則	外村 弘樹	早坂 昇一	森山 謙一
植松 敏樹	軒澤 力	高崎 博	日高真理子	山口 拓真
上山 昭治	北方 宏樹	瀧崎 章夫	廣瀬 一雄	山田 治彦
内野 直忠	北村 信彦	武内 清信	福田 眞也	吉井 敏昭
戎井 重樹	木村喜久男	田中 勝男	舟橋 健市	和田 壮司
遠藤 忠宏	熊坂 博幸	棚橋 公夫	朴 茂生	和田 芳幸
大久保孝一	黒田 克司	丹沢 好治	星野 幸夫	綿貫 一子
大原 秀三	高津 明久	塚田 知信	堀 義広	

■特別企画：日本公認会計士協会 茂木哲也会長インタビュー

「会計に関する社会の認知の向上と サステナビリティに関する我々の 能力開発を進める」

公認会計士白門会
前会長

北方 宏 樹



茂木哲也会長に会報誌「絆」に掲載するインタビューのお時間を頂き、協会の施策やプライベートのことも含めざっくばらんにお話を頂きました。

北方：まず会長が公認会計士を目指された動機はなんでしょうか？

茂木：よく聞かれるんですが、こういうことをやりたいから公認会計士になったというよりは、大学で簿記に触れ、面白いなと感じたのがきっかけです。経済学部だったんで必須ではなかったんですが、やってみたら面白い。これを続けていければと思います、公認会計士試験を受験しました。

北方：もし公認会計士にならなかったとしたら何になられていましたか？

茂木：銀行とか金融機関に勤めていたのではないかと思います。当時、周りを見ても金融機関に就職する人が多かったので。

北方：公認会計士になって良かったと思いますか？

茂木：はい、よかったですと思っています。経験できることが広い、また深さも深いです。

北方：ご自分を動物に例えると何だとお思っていますか？

茂木：この質問は難しいですね。あまり例えて考えたことはないですが。クマですかね？風貌が近いと言われます。そもそも人間みたいな面倒くさい動物はいないと思います。動物はもっと素直で自分の欲望に従って行動しますからね。

北方：お休みの日は何をされていますか？

茂木：お休みは少ないんですが、移動、ゴルフ、寝ているといったところでしょうか。土曜日は、金曜日まで地方にいた場合には、東京に戻る移動か、現地の皆さんとゴルフしているか、その地を巡るなどしています。何にもなければ、学生時代や監査法人時代の人と遊んだり、家で昼寝といったところでしょうか。心身、どちらかという心

をリフレッシュすることに充てています。

北方：好きな食べ物は何ですか？

茂木：寿司や、そば、パスタ、ラーメンなど麺類が比較的好きです。

北方：では嫌いなものはいかがでしょうか？

茂木：梅干し、納豆がダメです。

北方：会長は東京生まれの江戸っ子でいらっやいますか納豆がダメなんですか？

茂木：人間もそうですが粘っこいのは好きじゃない。酸味の強いものも得意ではないんです。食べられないことはなく、酢豚も食べますが。でも酸辣湯麺は好きです。

北方：茂木会長の好きな女優はどなたですか？

茂木：好きな女優は特にいないんです。あまりドラマとかは見ないので。ご期待に沿えず申し訳ありません。

北方：それでは好きな歌手はいかがですか？

茂木：歌手もその歌を聞きたいという方は特にないですね。

北方：ここから堅い話に入りますが、若い会計士の方に会長としてお話したいことはありますか？

茂木：いろいろあるんですが。注意することとしては自分が思っている以上に他人から見られている。そのことを自覚した行動が必要だと思います。前向きな方向から行くと公認会計士の職業、資格というのは、AIに代替されるという部分があっても、僕は将来は明るいと思っています。AIに代替されるというよりも代替してもらい、AIによって我々の将来はより一層専門性の高いものになっていく、もちろん、そのためには我々公認会計士は一層努力をして能力を高める必要がある。あと、若いうちに頑張ったことは必ず力になります。その基礎体力、土台を作るのは監査業務だと思います。会社を含め経済社会を幅広く見られたし、深く感ずることができたと考えています。

企業に勤められている方と比べたら、たくさんの企業を見ることができました。深さについても通常の社会人よりも格段に深い経験が積めたと考えています。

監査をやれば企業の経営に関する情報に触れる機会もあります。会社によって、承認の取り方や書類の回し方も違います。なんでそういう風に違うのか、よく考えてみる必要があります。単に自分が今やっていることを作業としてとらえるのではなく、なんでその作業をしているのか、自分が今やっていることをきちんと考えていただくことが将来の糧になると思います。

北方：協会の会長になろうと思った動機、きっかけは何ですか？

茂木：我々公認会計士って我々が考えている以上にいろんな力があると思っています。それを発揮できているか、発揮できていないとしたら何が問題なのかどういふことが必要なのか考えてみると、我々が自分たちの持っている力を過小評価しているのではないかと考えています。また、社会全体も過小評価していると思います。

会計・監査によって社会が得ている便益、効果はすごくたくさんある。でも社会の人々がきちんと認識しているかというところではない。日本の社会全体に会計が果たしている役割をきちんと認識いただいていない。その状況を変えていきたい。会計、監査、税務も含めた広い意味での会計の価値を広く社会の人々に認識してもらいたいと思います。

北方：会長として協会の問題点はどのようにお考えでしょうか？

茂木：ダイバーシティは進んでいるが生かしていないと考えています。2年前にビジョンペーパーをまとめた時に、我々公認会計士が持っている共通の価値は「信頼」と考えました。我々が関わることによって社会に「信頼」という価値を提供することができると思っています。一人一人の公認会計士はこの価値に向かった行動をしていると思いますが、業界全体として様々な公認会計士の相互理解に基づく、相互作用の発揮による業界全体としての力の発揮がさらに求められると感じています。

北方：残りの任期1年半でこれだけは成し遂げたいということはあるですか

茂木：成し遂げたいという発想はあまりないんです。すぐに成果らしきものが見えるように、何か拙速になったり、小さなことになってしまったりしそうなので。組織にとって、任期はゴールではなく、任期が終わってからも続いていきます。成し遂げるというよりも駅伝と一緒に、自分が襷をかけている間は自分のパートを走りぬくことが一番重要で、次の走者に良いポジションできちんと襷を渡したいと考えています。僕は会長としては第二十四代目の走者で、次の会長に襷を繋いでいかねばならない。穏やかな日和の中を走ることもあるし、逆風の中を走らなければならない時もあります。

最初に申し上げた会計に関する社会の認知の向上については、私の任期の中で種は蒔ききります。あとはサステナビリティ情報開示に関する我々の能力開発。公認会計士ってそういう分野を任せられる専門家だねという社会のコンセンサスを得ていくことが必要だと思っています。監査の価値の向上は社会の人の会計に関する価値の認識が高まらないと向上していきません。本当の意味でのリスペクトを集めるには時間がかかります。そのため今できることをやりきる。それを成し遂げるといふなら、将来に向けて種をまくことを成し遂げたいと思います。

北方：どうも貴重なお話を頂き、ありがとうございました。



監査業界での第一歩

商学部会計学科
(2022年卒)

中小原 杏優



2022年3月に中央大学商学部会計学科を卒業致しました、中小原杏優と申します。この度は、「絆」に寄稿する機会をいただき、ありがとうございます。簡単に自己紹介をさせていただきますと、私は2018年に大学入学と同時に公認会計士試験の勉強を始め、経理研究所で勉強に励んでおりました。大学3年生の時に公認会計士論文式試験に合格し、大学4年生の間は、経理研究所の学生スタッフとして、受験生のサポートをしておりました。卒業後はPwC Japan 有限責任監査法人に入所し、保険会社を中心に監査業務に従事しております。

1. 監査法人に入所して感じたこと

入所してから約2年が経ちますが、1番に感じるのは、共に仕事をする同期や上司の方々のレベルの高さです。当たり前のことではありますが、周りにいるのは全員公認会計士です。周りと比べてしまい落ち込むこともあります、尊敬する周りの方々のサポートのおかげで、毎日やりがいを感じながら業務に励むことができています。心から尊敬する先輩にも出会え、入所してよかったと心から思っております。

入所するまでは、「会計士って結局どんな仕事をしているのだろうか」と正直思っていましたし、1日中数字とにらめっこする仕事なのではないかと思っていました。もちろん会計基準や監査基準、数字とにらめっこしている時間も多のですが、意外にもクライアントとのコミュニケーションの機会が多いことに驚きました。コミュニケーションをとることになるクライアントの年齢や職階は様々ですが、どの方もその業界に精通している方々です。明らかに自分より知識・経験がある方々を前に、最初は緊張してしまい、恥ずかしながらきちんと目を見て会話をすることができなかつたり、適切な敬語が使えなかつたり、予め台本を作成して臨んだり、上手なコミュニケーションには程遠い状態でした。しかし、場数を踏むことは

やはり大切なようで、今ではあまり緊張しなくなりましたし、場数を踏む中で、どんなに緊張していても相手との会話に真摯に耳を傾けることの大切さを学ぶことができました。

2. 業務で感じた戸惑い

1年目の頃は、ありがたいことに入所してすぐに関与させていただいた監査チームの先輩方にとっても恵まれており、業務で戸惑いを感じるということはあまりなかったです。しかし2年目になると、今度は自分が先輩の立場となり、後輩に会社のことや業務のことについて、上手に教えてあげられないことにもどかしさを感じております。今までは先輩からの指示通りに作業をする日々でしたが、今度は自分が先輩として業務を教えなければいけません。自分が理解していないと後輩に指示なんてできませんし、まだまだ2年目ではわからないこともたくさんありますので、少々荷が重いなど思うこともありますが、だからこそ自身の知識の向上等に精進することができており、成長を感じる毎日を過ごしています。

3. 最後に

恥ずかしながら私は強い思い入れがあって会計士を目指したわけではなかったのですが、今振り返ると、「経理研究所で会計士の勉強をしよう」と心に決めた数年前の自分を褒めてあげたいと思うほど充実した日々を過ごせています。まだまだ未熟な私ですが、会計士として、人間として成長できるように、周りの方々への感謝の気持ちを忘れずに仕事に向き合っていきたいと思えます。今まさに会計士試験の勉強中という方に向けて、勉強している今はつらいこともたくさんあるでしょうし、勉強をやめてしまいたくなることも何度もあると思えます。でも、その先には明るい未来が待っていると私が身をもって実感したので、ぜひ諦めずに突き進んでいただきたいと思えます。1人でも多くの中央大学の学生が同じ業界で仕事を共にできる日を楽しみにしています。

研究大会札幌大会2023報告

日本公認会計士協会北海道会会長
研究大会札幌大会2023実行委員長
富 樫 正 浩



2023年9月7日から10日にかけて、研究大会札幌大会2023の全プログラムを無事開催することができました。全国から900名近い会員のご出席があり、大会は大成功でした。

7日の前夜懇親会は、北海道会の主催で研究発表者・本部役員・次期開催会である東海会実行委員の皆様をお招きして開催いたしました。2台ピアノの演奏、和心ブラザーズによる演奏をお楽しみいただき、二次会にも多くの方々にご参加いただいで大いに盛り上がりました。

8日の研究大会当日は、鈴木北海道知事、秋元札幌市長、大久保北海道財務局長のご臨席を賜り、開会式を行ったのち、新保史生慶應義塾大学教授より「AI・ロボットで変わる社会の仕組み」と題して記念講演をいただきました。最新技術であるサイバネティック・アバターまで話が及び、会員の皆様からは、興味深い話だったとの感想をいただきました。午後の研究発表では、北海道会からも2つの研究テーマでの発表を行い、いずれも好評でした。

4年振りに開催できた記念パーティーでは、岩田札幌商工会議所会頭、新保教授にもご出席いただき、アトラクションにはコンサドルズ、平岸天神に出演していただきました。実行委員の皆さんで知恵を絞った北海道の味覚もお楽しみいただけたようで、特設コーナーの料理は完食されました。

記念パーティーの終了後、公認会計士白門会の二次会が行われました。記念パーティーと同様に、研究大会での白門会も4年振りの開催となりました。こちらでも多数の皆様ご参加いただき、盛大に開催することができました。誠にありがとうございました

いました。

振り返ってみますと、当初開催予定であった2020年の研究大会への立候補を行ったのは2018年11月の地域会会長会議でした。2020年2月頃から始まった新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、同年6月の募集開始直前に札幌大会の中止を決断し、同年の研究大会は史上初の東京本部からの完全リモート開催に変更されました。翌年の福岡大会2021も感染者の増加が収まらず、現地からのリモート開催となりました。

そのような中、2020年大会を途中まで準備したノウハウを無駄にしたいくないという思いから、2021年11月の地域会会長会議で2023年大会への再立候補を行いました。その時点では新型コロナウイルス感染症の影響がいつまで続くのか、誰にも見通せない状況であり、もしかすると、再度中止またはリモート開催に追い込まれるのではないかと不安もあるなかでの決断でした。

2023年に入り、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけも5類に変更され、行動制限のない日常が戻ってまいりました。全てのプログラムを通常通りに行うことができ、本当に安心いたしました。皆様のご協力、誠にありがとうございました。

さて、私は、1993（平成5）年商学部会計学科を卒業し、中大大学院博士課程前期課程在学中の同年10月に当時の二次試験に合格いたしました。1993年といえば、本会が設立された年であり、合格祝賀会でいただいた記念品の象牙印は、今も大切に使用させていただいております。また、本会の初代会長である川北博先生は私のゼミの先生で

もあります。

本会報第1号を読み返しますと、川北先生や、志雲会の顧問としてお世話になった渡部裕巨先生がご寄稿されており、合格者氏名欄に私の名前も掲載されておりました。

合格後は監査法人トーマツ東京事務所に入所し、三次試験合格後に故郷である札幌事務所に転勤させていただきました。当時の札幌地区代表は簗本道男先生でいらっしゃいました。渡部先生と簗本先生は松戸の寮でルームメイトであり、大親友でいらしたということもあり、合格発表後トーマツへの就職が決まったことを渡部先生にお伝えしますと、「富樫君、札幌だったよね。じゃあ、そのうち簗本君のところに行くんだね。」とおっしゃいました。当時はそのような方がいらっしゃるんだなという程度の受け止めだったのですが、その後トーマツ札幌事務所を経て、簗本先生の個

人事務所を承継させていただき、現在に至っております。

渡部先生のお言葉がこのように現実のものになるとは、何とも感慨深いものがあります。これもひとえに、中央大学に入学したことにより実現したもので、大学には大変感謝しております。

会計士協会での活動は、2010年に北海道会常任幹事となり、2013年に同副会長及び本部理事、2016年に北海道会会長に就任しました。2019年に会長を退任しましたが、2022年に会長が欠員となったことにより、補欠選挙で再び北海道会会長に就任しました。

皆様ご存知のとおり、川北先生は本部会長、簗本先生は北海道会会長をご経験されており、私はお二人のご指導を直接受けるという幸運に恵まれました。この経験を生かして、今後も微力ながら会務にご協力させていただきたいと考えております。



次回研究大会告知

日本公認会計士協会東海会
広報委員会 ニュース分科会リーダー
和田 康 兵



来年度の第45回 日本公認会計士協会研究大会は名古屋での開催となります。名古屋大会2024では「破壊、創造、継承。前例踏襲を打ち

破れ」をテーマに研究大会を実施致しますので、皆様奮ってのご参加お待ちしております。

2023年度中央大学 公認会計士試験合格祝賀会

公認会計士白門会
幹事

加藤 亮



2023年12月18日、ホテル東京ガーデンパレスにて開催された2023年中央大学公認会計士試験合格祝賀会にご招待いただきました。合格者の皆様の門出をお祝いする良い機会をいただき、中央大学のOBとして、万感の思いでいっぱいとなりました。



< 会場の様子 >

2023年度の公認会計士試験の合格者の総数は1,544名で、中央大学からは55名の合格者を輩出したとのこと。そのうち経理研受講生は45名、経理研受講現役合格者は23名と、現役合格者が多い印象を受けました。



< 合格者の皆様 >

会場では何人かの合格者とお話する機会がありました。目を輝かせながら将来のビジョンなどを語る姿に、会計士の先輩として、たくさんの刺激をもらいました。特に合格者代表 山田さんのスピーチは「本当に大学2年生?!」と思うくらい心のこもった素晴らしい内容で感銘を受けました!

祝賀会の式次第は次の通りです。

- | | | |
|---------|-------------------|----------|
| ● 挨拶 | 中央大学 学長 | 河合 久 教授 |
| ● 来賓祝辞 | 日本公認会計士協会 会長 | 茂木 哲也 様 |
| | 有限責任監査法人トーマツ 包括代表 | 大久保孝一 様 |
| ● 乾杯 | 中央大学公認会計士白門会 会長 | 山田 治彦 様 |
| ● 記念品贈呈 | 中央大学 商学部長 | 井上 義朗 教授 |
| | 合格者代表 商学部会計学科2年 | 山田 彩乃 さん |
| ● 校歌斉唱 | | |
| ● 閉会の辞 | 中央大学経理研究所 所長 | 渡辺 岳夫 教授 |



< 合格者代表 商学部会計学科2年 山田 彩乃さん >



< 山田会長による乾杯の挨拶 >



< 集合写真 >

最後に改めまして、公認会計士白門会を代表して、合格者の皆様、おめでとうございます!

合格体験記

商学部会計学科
(合格時3年)

吉田和樹



私は中学生の頃から税理士になりたいと考え、福井商業高等学校に入学し、同時に簿記の学習を始めました。高校の授業で初めて簿記を学び、複雑な表の貸方と借方の合計が一致する原理や現実で起きた事象を会計情報として置き換える技術に非常に感銘を受けました。その結果、より専門性を高めたいと考え、高校のカリキュラムとは別に独学で日商簿記検定2級の取得に力を入れ、2年次に合格しました。そして大学進学の際に税理士試験の在学中合格をしたいと考えるようになり、税理士試験の在学中合格のできる大学を探しましたが、見つかることができませんでした。そんな時に、中央大学の経理研究所なら上位資格である公認会計士の試験に在学中の合格ができるという情報を見つけました。ただでさえ難しいと言われていた税理士試験よりも合格率が低い公認会計士試験合格を目指すことに不安を抱えつつも、中央大学に入学し、経理研究所で在学中に公認会計士試験合格を目指すことを決意しました。

私は入学後日商簿記検定1級の内容から学習を始めました。会計士試験の在学中の合格をするためには、高校までのように2、3時間程度の勉強ではなく、10時間以上の勉強量が必要で、一日のほとんどを自習室で過ごし、一人暮らしのため自炊も洗濯も掃除もしなければならず、加えて大学の授業の勉強も欠かせないため、毎日息をつく暇もないような忙しさでした。また自分が本当に公認会計士試験に受かるのか、もし受からなかった場合、今までの勉強の成果はどこにでるのかという不安を常に持ち勉強していました。そのような経験したことがなかった私には非常にきつく感じ、何度も挫折をして、受験勉強をやめようと何度も考えました。

そんな中、講師の方々や経理研の学生スタッフの方々から、「公認会計士に受かる人はみんな同じように苦しい思いをしていて、中途半端な気持ちで勉強していない。そのような思いをして合格するからこそこの資格には多くの魅力がある。」「中央大学で合格した先輩方は優秀な方ばかりで、社会で活躍されている方が多くいる。」と熱い言葉をかけてくださりました。また、「人生がかかっている試験なんだ。死ぬ気で頑張りなさい。」と喝を入れてくださるなど、私の学習相談にも親身に向き合ってください、私が入学時にした合格に対する決意の甘さを痛感すると同時に、合格した先輩方の情熱や姿勢に強烈に憧れ、初心を思い出し、絶対に受かるという覚悟を決めることができました。

私は日商簿記検定1級から、論文式試験まで、模試では常に低い点数で、平均点も超えることができませんでした。絶対に受かるという強い覚悟を持ち続けていました。そのことが結果として合格することができた最大の要因になったと考えています。

私は公認会計士受験のため勉強してきた内容や経験を通して、人の手助けをできる公認会計士になりたいと考えています。そのため現在は、学生スタッフとして、受講生の時の私と同じ思いを抱えて相談に来る受講生の力に少しでもなれるように精進し、卒業後は監査の完成形をしっかりと学び、IPO業務に携わり、企業の上場支援に貢献したいと考えています。

最後に、私が合格できたのは中央大学の充実した環境の存在や直接的及び間接的に支援してくださった多くの方々のおかげです。厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

合格体験記

商学部会計学科
(合格時2年)

山田彩乃



公認会計士の存在を知ったのは、商業高校に入学した時です。入学時にもともと会計士として働いていた先生と出会いました。その影響もあり公認会計士の存在を知り、憧れを抱いた覚えがあります。しかし、当時は部活動中心の生活を送っていたので公認会計士は雲の上の存在で自分が目指すとは思ってもいなかったです。朝から晩まで部活動のことで頭がいっぱいでしたが、その部活動で、人生で初めて大きな挫折を経験し、結果目標を叶えることができませんでした。部活動引退後はすぐに切り替え、その悔しさのすべてを会計士試験にぶつける勢いで本格的に勉強を始めました。大学入学時には、すぐに経理研究所に入所し毎日勉強漬けの生活を送りました。もうあの挫折を経験したくないという強い思いから、何があっても諦めないという鉄の心で学習に取り組んだ結果、入学してすぐ短答式試験に合格し、2年生で論文式試験まで合格することができました。もちろん、辛いことの方が多かったですが、経理研究所で仲良くなった人たちと一緒に笑い合ったり、慰めあったり、特定の論点について口論したりしたのは、受験生時代の自分のモチベーションになりました。さらに、学習を進めていくうちに、様々な企業を監査できる会計士は多種多様な知識を身につけることができ、いつまでも学ぶことにゴールはないと感じたため、自分にとってピッタリな職業だと気づきました。試験勉強中、様々な苦労や

困難な出来事がありましたが、それを乗り越えたことで自分に自信も着き、人間として、成長できたと思います。このように多くの方が勉強に集中できる環境づくりに尽力してくださったおかげで今の自分があります。自分1人の力で合格はつかみ取れなかったため、この感謝の気持ちを忘れず大学や経理研究所に恩返しをしていきたいです。

公認会計士試験に合格したことにより、様々なキャリアプランを思い浮かべることができ、将来の選択肢が広がりました。学生の間は学業に慎みながら、様々な方と言葉を交わしたり、海外へ旅行に行ったりと自由に社会の様子を観察したいです。働き始めたら将来のキャリアプランを想像しながら最初は監査の経験を少しずつ積んでいきたいです。そしてゆくゆくは、地元に戻って経験を活かし、自分がなりたい方向へゆっくり進めていくのがベストだと思います。その中でも自分自身の専門性を高め、会計のプロフェッショナルである会計士の中でもとりわけプロフェッショナルな存在になれるよう日々学ぶことを忘れない謙虚な姿勢を大切にしていきます。

最後になりましたが、これまで関わってくださった方々、学習しやすい環境を整えてくださった大学の関係者のみなさま、本当にありがとうございました。

合格体験記

経済学部経済情報システム学科
(合格時3年)

石井雄大



私は、高校3年生で日商簿記1級を取得し、中央大学に入学しました。その後、短答式試験で2回の不合格を経て、大学2年生の12月に短答式試験、大学3年生の8月に論文式試験に合格しました。

私は高校の簿記の授業を通じて、会計監査のプロフェッショナルである公認会計士の存在を知りました。当時から、数字を用いて企業活動を表現する簿記・会計の世界に興味を持っており、また、専門性の高い職業に憧れを抱いていたため、自然と将来の目標が定まりました。さらに、進学先を検討する際に経理研究所のパンフレットを参照し、公認会計士の使命として「国民経済の健全な発展に寄与すること」が公認会計士法第1条に定められていることを知り、その社会貢献性の高さに胸が高鳴ったことを覚えています。

しかし、大学入学後の学習は、困難の連続でした。新型コロナウイルスの影響で通学ができず、公認会計士を目指す友人が周囲にいなかったことから、学習意欲の維持に苦勞しました。また、大学4年生まで学習期間に猶予があると錯覚してしまったことも、共に短答式試験に不合格となった最大の要因です。これらの「学習意欲の維持」は、公認会計士試験に向けて学習する後輩に向けて指導したい最も重要な要素です。また、困難と隣り合わせの公認会計士試験の学習は、人生で最も多

くの時間を費やし、最も多大な努力を注いだ経験でした。試験の合格という「結果」を勝ち取ったことで、自信を獲得できたことをうれしく思います。

今後、まずは学生非常勤として、監査法人での勤務が始まります。事業分野としては、監査一般を選択しました。これまで試験勉強を通じて学習してきたことであり、公認会計士の独占業務である点で社会に向けて希少価値を提供できることに魅力を感じるためです。しかし、未だ実務を経験していないため、現時点で明確な将来像を見出すことはできていません。漠然としています。現時点では公認会計士として、また1人の人間として監査チーム、クライアントを問わず周囲から信頼される人物になりたいと考えています。そのため、会計監査についての専門的な知識や、高度な人格が欠かせません。まず、専門的な知識は、補習所の講義やCPDに積極的に臨み、また、実務においても意欲を示して各業務に主体的に挑戦を試みることで身に着けます。さらに、高度な人格については、実務を通して、監査法人の先輩方や各クライアントの方々のように、周囲からの信頼を得て活躍されている方々と接し、信頼される人物が備えるべき要件を模索していきます。

最後に、公認会計士試験の受験においてお世話になった全ての方々に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

CPA ゴルフ十月会

公認会計士白門会
副会長
柴 毅



公認会計士白門会、ゴルフ担当副会長の柴毅です。
2023年10月9日、CPA ゴルフ十月会が、茨城県の名門、茨城ゴルフ倶楽部にて開催されました。

参加者の状況は、下記の通りです。

予定では、当校8名、法政9名、慶応16名、早稲田14名、一橋6名、明治5名、専修5名、日本4名、東京4名、立教5名、東京経済5名、成城1名、学習院5名、合計87名でしたが、当日運悪く雨が結構降り、気候も低い状況下でキャンセルも出て、最終的には当校6名、合計74名でした。

当校からの参加者は、柏壽周弘氏、成田智弘氏、富樫正浩氏、澤田昌輝氏、金塚厚樹氏、私の6名でした。

結果ですが、悪天候の中、中々実力を出し切ることができず、少し残念な結果となっております。個人戦では、エース富樫氏が13位、金塚氏が29位でした。私は40位の飛賞を獲得しましたが、

個人、団体での受賞はこれだけでした。

団体戦は、各校上位4名の合計(Net)で競いますが、優勝一橋大学(Net291.4)、準優勝慶応大学(Net302.2)、3位早稲田大学(Net302.4)、当校は残念ながら9位(Net309.2)でした。

大会を終えての感想ですが、まずは、今回、悪天候のため当校の参加者が前年から2名減ってしまったことは残念でしたが、金塚氏、澤田氏の2名が初めて参加していただき、若干平均年齢が下がったことは嬉しい限りです。

成績については、優勝校との差が、18打差あり、ネットでのこの差は相当の実力差だと思います。この差を埋めるには、若くて新しい力が必要です。ゴルフ好きの方は是非当会に入会し、大会に参加していただければと思います。

今年も10月の初旬に開催される予定ですので、こぞってご参加いただくようお願いします。

◆ 寄付のお礼 ◆

以下の方々から寄付を頂きました。ありがとうございます。

麻生久美子	大原 秀三	齋藤 俊勝	成田 智弘	森杉 美保
石井 宏明	神山 敏夫	高崎 博	日高真理子	山田 治彦
板谷 秀穂	軒澤 力	塚田 知信	舟橋 健市	
伊藤 大義	黒田 克司	土井 英雄	峯 敬	

新春講演会及び賀詞交歓会



公認会計士白門会
幹事

山口 拓 真

2024年1月23日（火）に、中央大学駿河台キャンパスにおいて、恒例の新春講演会及び賀詞交歓会が開催されました。

昨年に引き続き、本年も中央大学法曹会との交流会を兼ねた合同開催となり、法曹会から17名、当会から20名の皆様にご参加いただき、大変有意義な会となりました。ご参加いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

新春講演会には、中央大学法学部のOBであり、元・名古屋高等検察庁検事長を務められた青沼隆之先生を講師にお迎えし、「第三者委員会における活動」と題し、検察官・法務官僚・弁護士などでご活躍されたご経験をもとに、企業不祥事の分類や発覚の端緒、第三者委員会の役割等について、ご講義いただきました。

講演会の前半では、上場企業によって公開された調査報告書の分析に基づき、その多くが意図的に行われたもの（不正）であること、その中には、品質不正・談合・労基法違反等の不正行為も含まれるものの、7割超が不正会計・会社資産の不正利用といった、監査人が財務諸表監査において対象とする重要な虚偽表示の原因となる不正に該当するものであるといったお話がありました。また、日本における不祥事発覚の特徴として、経理財務業務（決算業務、決算分析、債権管理等）の過程で発見されるケースが多く、その一方で、内部監査や内部通報制度により発覚するケースは少なく、米国と比較して内部監査が脆弱であることや、内部通報制度が未だに機能していない点についての問題提議もありました。

企業不祥事の事例を分析することにより、内部昇格で役員になることが多い日本企業の特徴が、コンプライアンスに大きな影響を与えているとい

う事実を再認識するとともに、監査法人で上場会社の監査を実施する際には、企業のコーポレートガバナンス改革に向けた取組みと歩調を合わせる形で、監査役等や内部監査部門とのコミュニケーションを密に図り、監査役等や内部監査部門の独立性や倫理観について、リスク評価にも適切に織り込むことが重要であると改めて感じました。

講演会の後半では、某中古車販売会社の保険金不適切請求事案の事例とともに、第三者委員会の役割について解説いただきました。第三者委員会の設置に至る経緯や不適切な行為が横行する原因等について、コーポレートガバナンスやコンプライアンスの観点を交えたご講義であり、直近で世間を騒がした不祥事ということもあって、ご参加いただいた皆様も熱心に聞き入っておりました。

青沼先生の豊富な事例を踏まえたご講演はどれも興味深いものであり、日頃直接関わることのできない第三者委員会という組織が、どのような目的・経緯で設置され、どのような活動を行っているのかについて幅広く知ることができ、貴重な体験となりました。青沼先生のご講演を拝聴して、コーポレートガバナンスの重要性も再認識することができたため、ご講演の内容を今後の業務や研鑽に生かしていきたいと思っております。

新春講演会の最後に記念撮影が行われた後、同じく中央大学駿河台キャンパスにある Good View Dining に会場を移して、賀詞交歓会が開催されました。

昨年と同様に、法曹会の皆様と当会会員の間で活発な情報交換が行われ、懇親を深めるとともに、講演会の内容について語ることができました。また、青沼先生にも講演会に引き続きご参加いただき、講演会ではお聞きできなかった貴重なお話

も伺うことができました。

本年は、昨年ご参加できなかった皆様にも多くご参加いただき、大変貴重な講演会、賀詞交歓会となりました。また、周到にご準備いただいた中央大学法曹会の皆さまにお礼申し上げます。

新春講演会及び賀詞交歓会を通じて、業種も異

なる多くの方々と触れ合うことができ、今年1年に向けて気持ちを新たにする機会となりました。法曹会と当会の交流もさらに深まることを願い、来年度も引き続き合同開催を企画しておりますので、ぜひより多くの皆様にご参加いただければと思います。



< 講演会集合写真 >

令和5年公認会計士試験 出身大学別合格者数

1位 (1)	慶應義塾大学	165	(187)	7 (8)	京都大学	50	(47)
2 (2)	早稲田大学	128	(109)	8 (7)	神戸大学	44	(50)
3 (3)	明治大学	101	(86)	9 (10)	一橋大学	38	(38)
4 (4)	東京大学	56	(57)	9 (—)	法政大学	38	(—)
4 (9)	同志社大学	56	(44)	9 (5)	立命館大学	38	(54)
6 (5)	中央大学	55	(54)				

() は前年順位及び人数

人数は一般財団法人会計教育研修機構による実務補習所登録者数(2023年12月現在)

編集後記

公認会計士白門会 清水 健太郎
絆編集担当幹事

前任から引き継いで本号より絆の編集を担当することになりました清水です。実は最初に編集をやってほしいと依頼を受けたときには一度は固辞しました。普段から本や雑誌をろくに読まない自分には編集のセンスなんて到底ないと思ったからです。それでも会長から「そんなに難しいことは要求しないから全然大丈夫」だと押し切られました。そして、ふたを開けてみると最初の幹事会で「絆を刷新したい」と会長から無茶ぶりされ…、ちょっと騙されたような気もしつつ、やるからにはより良いものを作りたいと自分なりに色々企画を考えました。本当は本号の一番の目玉企画にしたいと考えていた第100回箱根駅伝観戦記。前年2位という実績から大きく期待が膨らむも、結果は大変悔しいものに。構想も泡へと

消えました。絆の原稿の回収においても苦勞の連続で、当初設定した締め切りに間に合わせてくれたのは合格体験記を書いてくれた学生3人と2022年卒の中中原さんのみという状況で本当に3月末の発刊に間に合うのだろうかと冷や汗ものでした。それでも、執筆者の皆様はラストスパートは凄まじく、最初の心配を余所に終わってみれば十分余裕のあるスケジュールでの校了を迎えることが出来ました。執筆者の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。かくして記念すべき第30号の発刊にこぎつけることができました。本を読まない私ですが、今後は、本や冊子を手にしたときにはその編集者の努力や苦勞にも思いをはせることになるかもしれないと考え、今日この頃です。

公認会計士白門会ホームページ : <https://cpa-hakumon.com/>



公認会計士白門会会報 No.30

令和6年3月31日発行

発行人 公認会計士白門会会長

山田治彦

発行所

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
中央大学経理研究所気付